



目次

- △研究事項
 - 林業趣味の養成に就て
 - 森林と昆虫
 - 琉球孤島に於ける森林植物に就て
 - 拾有十年回想録
 - 箱根みやげ
 - 永劫の雪
 - 満州便りの一節
 - 編者室より
 - 會員動靜
 - 會員死亡
 - 墓中見舞謝禮
 - 正誤
- 菊地一園原咲也
- 西澤生
- 今野啓藏
- 苑の里人
- 信田中
- 告

大正九年八月廿五日 第三十三號 每廿五日發行 明治四十四年六月十四日

林業趣味の養成に就て

西澤生

趣味とは何ぞ、人の事物に對し其の面白味を感ずるより起るところの愉快の情なり。此情は何人も之れを能くし得べしものなれば、趣味は何人もこれを養はざるべからず。趣味ある人の目より見るときは天地萬物すべて是れ愉快ならざるはなく、日月星辰、山川草木、禽獸蟲魚より次て日常の起臥飲食交際會話その他吉凶死生平和戰闘等に至るまで盡く一種の趣味を感ずるを得べし。而して趣味なるものは常に人の追求するものにして、或る一つの趣味を起さば更に進んで之を欲し漸次其の趣味を追求して罷まざるものなり。其の因て起る動機は事物を理會して會得したるとき、或は何等かの技術の上達進歩したるとき或は勤勞に酬ゆる効顯ありしときなど現出する心理的作用にして何れも快感を起すものなり。されば苟も此世に生を稟けつ、ある吾人は趣味の念は常に没却するを得ず、夫れ一國の政事家は國政に參與するを以て其の本務となし幾多の學者は學理の研究に力め其の他農工商其の階級の上下何れを問はず吾人其の殊に向つて上下大小の趣味を有するものなり。又其の上下大小の趣味は各人の職業能力程度の如何に依つて固より一様ならざるも愈々其の職に功妙なればなるほど趣味増加し愈々濃厚なる趣味を追求し同時に知識能力之れに連れて進歩發達するものなり。

されば吾々林業界に職を置くものは人生の大半を山中に送るものなれば林業上の趣味を進んで需むることを講究せざるべからず。即ち斯業に對し可及的努力を盡して或は研究に或は技術練磨に直進奮闘盤棋錯節を排したる後、高尚深遠なる趣味は津々として湧き出づるに依り油斷大敵倦はす専心に層一層の努力を以て學理と實際とを對照し常に疑問ならば之れを先置其他の識者に質し絶へず新智識を獲得することに力めなば必ず高尚深遠なる趣味を開展するに至るべし。彼のアマゾン川の流は世界の大流なれども其の源は僅か滴る泉なるべし、吾人の林業に於ける趣味も初め其多微々たる者の如きなるも漸次日を經月を重ねるに従ひ愈々増大して遂にはアマゾン川のその如く趣味は甚大なるものとなるに至る。

その趣味は吾人の智識能力程度に依りて多少の相違あるは免がれざるが余の趣味とするところの一端を述べれば林中生活は第一に身體をして健全ならしめ隨て剛毅果斷の精神を養はしむ即ち作業の際には自然に接し新鮮なる大氣を呼吸するのみならず新緑濃かなる山巔に至りて勞働に服し老松の下に腰を下せば櫻花燦然として白雲の標へるが如く又彼の類熱燦くが如くにして流干瀧の如きと雖も下刈其の他の作業に服し笠を脱して涼風を迎ふれば清風徐々に來りて體自ら軽く時どきは微風の樹木に當りて天然の美妙なる音樂に接し松籟の衣袂に入り心

神爽快ならしむるに於てをや其の愉快は彼の大夏高樓に住し寒暑を避けて轉住する者の得て呼ぶべきものにあらざる。第二に山を越へ谷を渡り鬱林畫向暗き處に息ひ禿頭奇峰岩骨の現はる、所を攀ち自己の植栽經營する所の林木にして年々歳々梢頭の緑を増して成長すると同時に手入保護等遺漏なきをつくして年次其の生長量の大きな状態を目撃しつゝ、あらば恰も慈母が其の子の成長を樂むと何ぞ異なるらん、吾人が理想の森林を經營せんとするは慈母が其の子を理想的人物に養はんとするに等しけん。慈母にして正に理想的人物に養生し得たりとせば其の喜ばしき果して幾何ぞ、吾人は又林木が理想的の結果を將來に得たりとせば、其の快感喜悅何ぞ前者に近からんや。

森林と昆虫(其一落葉松)

有爲なる林友會員よ、諸君は實に未來の花やかなる林業界に活躍すべき使命を有する者なれば、斯業に對する趣味を喚起し、自己の立身成功を圖ると共に、國運の發展に貢獻せむことを期すべきなり。(完)

菊池

然太古に溯り原人に歸つた心地がした自由な偉大な心持がして其處に自己と宇宙とが合体し時間の世界を超越して何とも言はれぬ妙境に入つた事があつた我五百の同窓の多くは常にこゝ言ふ境涯に修養せらるゝことが多いと思ふ自由は森からと誰かと叫んだ近代的改造も山から出た絶對境に根本的宇宙觀人生觀を体得した人々により啓著せられたり誰かある現代改造の先達森林哲學の提唱者たらざるか本題の杉が何處かに行つてしまつた先年米國ハーバード大學から派遣された森林植物學者ウイムソン氏は本島探險中徑二間餘もある老杉の切株を見つけたとのことである本島の杉は舊藩時に於ては津島氏種子島藩より借り貰ひをなし屋根板子樽九桶材等を出させて居つた様で今日老木の數間高い所に屋根板を採取した痕跡を残して居る

及びその成虫、蠅類の蛆、これは肛門に近く二黒点あり、この外に鉅蜂科と思はる、蜂一匹、体色黒く大きき一寸ばかりのもの相續きて出づ。七月二十三日乙の母蛾死す蛾になりてより一週内外産卵し終りてやかで死す、然るに雄蛾は一日か二日の命しかなきもの如し、猶蛆を入れ置きたる瓶の土中よりは蠅數匹飛び出づ。肉蠅に似て脊上に三縦線あり身長は三分五厘より五分に近きものあり、かくの如くにし此頃にては單に蛾の毛群にて蓋はれる卵粒を残すのみとなれり。食害の爲め慘々たる目に逢ひたる落葉松はブラコ毛虫等の退却につれ次第に葉を増し枝を伸ばして生活力恢復をはかり七月末には曉春若葉の頃様の木振りとなり八月下旬の觀察によれば殆ど害虫を認めず生長佳良なり

名林名木として保存を計り度きものである
人工林 人工林は沖繩本島の北部迄存在する是より以南では育たない沖繩の俚言に杉は海を見ると枯ると言うて居る通り潮氣を含んだ風に當ると枯死する土地と空氣の乾燥を嫌ふ所から種子島に於ても山の谷間々々の陰濕肥沃な狭長な小面積の地域を限り周圍に固有の常綠闊葉樹の防風林を繞らして居る種子島では舊藩時自由にして杉山仕立を許可したらしく現今も多數の舊仕立山が存在して居る沖繩では藩廳御用材として北部百五十餘ヶ村(今の字)の森林には一ヶ所以上の仕立式の造林を担当せしめ矢張今日迄残つて居るものが多し其種苗は鹿兒島からとり寄せたもので二百年前禁濠幸相の時代らしい南方に進む丈杉の生長は悪い肥大生長は相當でもに上生育が五割乃至七割に及ばない五十年生で直径六七寸しかならないものもある舊來のものには凡そ挿杉である種子島の杉を調べて見ると左の數種に別つことが出来る
一、さし杉 舊來の杉林に産するもの
1、あか杉葉は淡綠針葉短く密茂せず樹皮赤く材淡紅褐色を呈して美はしく幼時の生長稍晩さも高早度迄生長を持続し開花結實せず八十年生にして徑二尺長さ十五間に達せる者を見たり造林用として賞用せられ日州杉

琉球孤島に於ける森林植物に就て

園原 咲也

8。 杉、栂、沖繩にてはすきに杉葉葉杉に杉を當て、ある
天然林度で紹介した如く屋久島の杉林である詳細精確な事は他日の調査に譲り記憶や感想の一端を語らう其播布區域は三千尺から五千尺位の間に北東方面に多く西南方面には少ない様であつた秋田の杉林の様な大面積の純林はない樅や栂やまくるまはりぎり等の温帯産の樹木と混生して居る其畜積はやまぐるまに亞ぎ最も多く南島の邊域も山地險峻なると良港のなかりしと且人文の進まなかつたのと藩廳の政策もあつたらう直径五六尺以上年齡千年二千年を數ふ可き老木なる巨木に至る所に散見し其占領面積も一方可歩は下るまいと思へる吾々の登山の時休んだ老杉の切株は中が空洞になつて居つて六疊敷位の廣さで株の上には徑一尺許の若杉が生じて居つた其晩泊つたのは倒れた老木の洞の中であつたが猿の泣く聲に目をさまして見上ると日光が老杉の間から洩れて来る靜かな風が梢をならし居る猿の聲が人遠く聞ゆる閑寂の境地宛

なりと傳ふ

2、いろ杉 葉黒綠針葉長く枝葉密茂す樹皮黒味を帯び材も又黒褐色を呈す幼時の生長早さも十五年頃より開花結實し大材を産せず九太材柱角の生産に適す材は耐濕力強し
3、半途杉 往前二者の中間にあり屋久産系の杉と稱せられ生長早く人一代に三回更新し得と傳へ屋久島に近き南部の森林地方に栽植せらる

二、實生杉
近時吉野紀州方面より種子を取り寄せ栽培しつゝ、あるものにして其の位地を撰ばず栽植せしものは早くより開花結實し萎縮の末枯死するに至るも其適地に栽へたるものは十年にして徑五寸高さ三間にするものあるを見たり

沖繩に於ける挿杉は主として赤杉なるもの、如く其生長量は遙に種子島地方に及ばざるも適濕肥沃の地に栽へたるものは相當の生育をなし近時實生杉を試みるに二年生にして二尺、三尺の山出苗を得山地に植栽して殆んど枯死するものなく十五年生にして五寸角を産出すべき大きに達せるものあり北部十町歩の森林中には一、二千町の適地は存すべきを以て需用の半額位は供給し得べきを信す現に沖繩百萬圓に達して居る

9 廣葉杉 からやうざんクローインチャイ(沖)

福州杉、琉檜
原産地は支那福州地方にして舊藩時琉球
進貢船により輸入せられ更に本土に傳播
されたもので琉檜の名を持つて居る木曾
の寢覺の御寺にも數本あつたと記載して
居る種子島には見なんだが沖繩には杉仕
立林中に混植しあり生食は杉に數倍し挿
木により繁殖が出来る

沖繩に於ける杉と廣葉杉の生長量比較

特種	10	20	30	40	50	60	備考
杉	0.1	1.8	4.5	8.0	13.0	27.8	材積
廣葉	4.0	11.5	23.3	1	1	1	立方

廢葉杉は如斯良生長を有し本孤島の好適
樹種だけれども非常に風に弱く中幹を打
られることが多く矢張適潤肥沃の地に充
分なる防風設備をしてやらねばならぬ其
潮風に抵抗する力が弱く一体に脆弱だか
ら用材としても天井板壁器具材等の外
床や柱桁等には用いられない

10 扁柏亞科の林木 ひのき、さきはら、この
てかしは
ひのきは予は屋久島登山中單に一本を見
た多少あらうが澤山はなからう種子島西
の表に周圍二尺許りのもの一本あつた矢
張丈が短い四五間位であつた十五年生で
徑五寸高さ三間位のものもあり余の植栽
したものは五年生で六尺乃至七尺になつ
て同時に植えた杉よりも生長がよかつた

土地の悪い所では南日本では杉より扁柏
が生長が好いと云はれて居る大島では旺
に扁柏の造林を始め居るさうである沖
繩の舊藩時代には扁柏を植ゑたらしいが
現今一本も見つからない林政八書には造
林法迄のせてある北部の山中で苗木を仕
立て見るに一年生で五寸に達し二年生で
一尺になつて居る三年生一回床替で山出
が全部出来ると思へる

さきはら(花柏)は屋久島では見つからな
かつたが種子島の杉林内には大低一本宛
混植されて居る木曾なんかも此樹は空
洞の出来る木だが種子島では直徑五六寸
位から根本の心に腐朽が入つて全木を枯
らしてしまふ大木を見たことがない白蟻
が多くついて居る杉にもよく白蟻がつき
易いが花柏には余分に來る様である
側柏(このてかし)は支那原産の林木だ
らうで本土でも庭園に稀に見る所である
種子島には一寸一寸見たが沖繩では未だ
見ない高さ三間徑五寸位なものもあるよ
く開花結實をして苗木も簡易に養成出來
るひのきの園藝的變種も近時庭に見受く
るが其生育は那覇附近では餘りよくない
11 椴亞科の林木 もみ、つが、ごがさはら
つか及ごがさはらは屋久島の山中で普通
に見られる椴も多少存して居つた様だが
明でない種子島の西の表には庭園に數本
の椴があつてよく開花結實して居つた
沖繩本島の北部大宜味村字饒波の山中の

舊仕立林中に一本の椴があつた徑五寸高
さ三間許りでは是が沖繩縣唯一の椴の木で
あつたが枯れてしまつた鬼に角椴は暖帯
の下部にも育つと言ふ事は明である
12 杜松屬の林木 びやくしん、はいねすじ
まむろ此類には特殊なものがある
屋久島の頂上にはびやくしん及はいびや
くしんが澤山自生して群落をなし居つて
有名な花の紅時は此が杜松の築山を周ら
した地である屋久島の人には是をビヤクダ
ンと云うて居る種子島の海岸の砂地には
はいねすじが自生して居る方言アケビガラ
と言ふ砂地封鎖には適當な樹で他の針葉
松柏類と違つて黒色の漿果を着ける此者
は予未だ沖繩方面に見ないものである種
子島を以て南限とすべきのか
しまむろの一種 ジュニベルス、タツキ
シマオリ

沖繩にしまむろを産すと書いたものがあ
るが小笠原産の椴な直立莖を有するもの
は未だ採取しない沖繩産のものは地上に
匍匐するもので其大なるは一本にてよく
百坪の青毛氈を敷いて居るものがある慶
良間群島に見事なものが多く國頭郡屋我
自楚州久志等にもある北者はハイビヤク
シンにて針葉が更に長く更に地上に平た
く這生するものである是はシコムロの
一變種として、新種が出来たらうと思ふ
臺灣にも此類がある様である、同一種か

も知れないびやくしんは八重山に比較的
多く栽培品があつて鳥賊釣りの柄竿に用
ゐられて居る

13 水松 水松乃ちタキシユムは南清に産
し水邊に生ずと聞いて居る本孤島中單に
一本を存して居る夫は沖繩縣中頭郡美里
村字松本と云ふ所で四五百年前其地方の
領主按司の屋敷跡とか言ふことで池の中
の築山に生じ高さ十餘間二間許り上は枯
れて白骨木となつて直立し側枝丈生きて
居る人では此木の枯たことは知らない昔
から此木が枯れて居つたと云ふ地方の人
も矢張水松と稱して居るが口傳が一つも
残つて居ない思ふに大琉球時代南清貿易
の遺品であらう當に老樹名木誌に載すべ
き樹木である恐らく日本に一本しかない
老木であらう

以上で針葉樹類が終つたつもりであるが
近時臺灣産の稍楠木や臺灣赤松、南洋杉
(アローアリア)等を植ゑて見たことがあ
つたが成績の解らない中に枯らしてしま
つて何等の報告も出來ぬ種子島に米國産
のサクブレヌバインを植ゑて見た人があ
る是は立派に生長して居つた此木は耐蟻
性木材として知られて居るもので一種の
蟻の忌む物質を含んで居るとのことであ
る廣杉も又耐蟻性材としてある
以上針葉樹論は別けて未成品で杜撰を極
めて居る我輩は未だ本多博士の針葉樹篇
を讀んで居らぬこんなつまらぬものが五

年も續いたら會員諸君の迷惑は勿論本會
引いては母校の面よとしかも知れぬが僕
に金が出來たら自費で出版をして配る考
へである夫迄は御容赦を願つて置く。

第二章 單子葉類の林木

禾本科の植物中特強剛多年生の稈を形成す
るものを竹類と稱して居る我琉球孤島に産
する竹類左の如し

屬 名稱

ま だ け ま だ け
産地産況 各地各島に産す栽植

種子島及屋久島

ほてい ちく

種子島より沖繩本島迄自生的
又栽植

稀庭園種子島より沖繩迄

種子島に小量自生

種子島屋久島七島自生

種子島より八重山島迄自生又
栽植

沖繩本島及附屬諸島並に宮古
島自生

おもと だ け

八重山島西表及石垣二島自生
やくしまさ、
屋久島自生

種子島庭園栽植稀

種子島より八重山島栽植稀

今栽植庭園

各島に栽植頗る多し

六 屬 十 四 種

14 ただけ 方言 からたけ(各島)

有用竹類の霸王たるただけは本孤島には
産額多からず殊に沖繩縣下には年々砂糖
樽の輪竹として三萬圓位宛鹿兒島より輸
入し大島種子島等は單に自給するの程度
に過ぎず島地は一般に是等ただけ屬の竹
類の生育には好適せざるもの、如し)
舊琉球藩にては藩廳用として各村(今の
字)に一ヶ所以上の竹敷を仕立てしめ其
面積一反内外なるも除草土寄せを怠らす
正月各戸にて殺す豚の骨を凡て竹敷に施
肥せしめ田の溝渠の泥土をすくひて土寄
せとなし林政入書には丹冊形更新法を教
へ三年以上の熟竹を伐る可きを記せり舊
制改革後は等竹敷は土地豊饒なるより多
分開墾せられて農地となり今日に於ては
僅に其殘骸を残すに過ぎず故老の傳ふる
所によれば高さ十四五間周圍一尺の良材

を産したりと筍は食す可きを知らず或る横着なる本土より赴任せる小學教員は薬用と稱して多数を徴發し竊に味噌和へどし晩酌の肴に供せり。

り小形にして其稈の臺部近き歪形にして凹凸膨大し布袋の腹の如しとて此名あり鹿兒島縣哈良郡には數十町歩に亘る大竹原あり馬を引きて筍採取に行くと云ふ筍は最も美味なり種子島にては屋敷林内に保護栽培し日常用に供し高さ三四間周圍四五寸のものあり臺部の歪形部多からず形をウサンと言ひ小形にして歪形部多きをコサンと言ふと説くものもあるも明ならず沖繩本島の如き至る所本竹叢を見るも筍の亂採竹材の濫伐の爲大なるものを産せず筍は最も美味其膨大せる部分の筍を鐘詰としたることありと聞けり鹿兒島にて垣根等竹等の小用材に用ゐらるる

に載せ更に其記録を編集し置かれん事を要望せり。予は閑を得て舊文献の探究に志す可く尙侯爵家及沖繩縣知事に建白して種苗を鹿兒島の同竹林より得江南竹林の新設を切望するものなり名勝史蹟天然紀念物問題は是等の點を研究せられ度きものなり鹿兒島には巨大なる孟宗竹と産し名産として器物乃至花筒として縣外は勿論海に輸出せらる一尺四五寸の周圍を有するものありと云ふ。種子島には若干の孟竹林あるも著しからず植竹花筒等は多く鹿兒島より輸出せり。

法令

(抜萃)

- 公有林野官行造林法 法律第七號 大正九年七月二十七日 第一條 國ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ公共團體トノ契約ニ基キ收益ヲ分收スルノ條件ヲ以テ公有林野ニ造林ヲナスコトヲ得 第二條 前條ノ規定ニ依ル造林ニ係ル樹木ハ國ト公共團體トノ共有トシ其ノ持分ハ收益分收ノ歩合ニ均シヲモノトス 民法第二百五十六條ノ規定ハ前項ノ樹木ニ付之ヲ適用セズ 第三條 國ハ第一條ノ規定ニ依リ造林ヲナス公有林野ニ同條ノ契約ノ季續期間中地十權ヲ有ス 第四條 公共團體ハ第一條ノ規定ニ依リ造林ヲナス公有林野又ハ第二條ノ規定ニ依ル持分ヲ所分スル場合ニ於テハ國ノ承認ヲ受クベシ



十有五年回想録 (第二回承前)

大正九年八月山林生活より 珍竹庵主人

ラ受クベシ 第五條 第一條ノ規定ニ依リ造林ヲナス公有林野ノ產物ニ屬スル權利ニシテ國ニ屬スルモノハ勅令ノ定ムル所ニ依リ當該公共團體ニ之ヲ讓與スルコトヲ得 附則 本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

釋尊曰く 「慈父の恩高きこと山王の如く悲母の恩深きこと大海の如し」と

父母の恩は釋尊に限らず四海同胞皆其に之を感ずるは一様である余も亦現在ある四恩の一として先づ親恩を首位に置く而して親が子を養育教養するに人一倍の心痛をなせるものなる事は「子を持つて知る親の恩」にて今余が多数の子女を教養する時代に至りて切に感ずるが古來聖賢の教を座右の銘となし自警のモットーとするは多くの人のなす處今の學生連中に於てもそれ／＼の工夫をなし教訓の資となす斯の家康遺訓光園遺訓楠公家訓などは最も廣く世人の尊敬する處である

然して余には未だ世人の知らざる父親の家訓か我在學時代より現在否未だ迄も座右の銘として尊重するものがあるそれは駒場農科大學に始めて遊學した明治三十五年九月父の贈られし書狀中に封入されたものであつた之は現在の學生仲間には共通性を有するものが尠くないと信ずるから左に之を連載して見よう但し全文は二十ヶ條より成立し居るも三ヶ條は全く私家特有のものご信じ之を省略せり

衣類の家訓

- 一、修學中は他事を顧みることなく一心ふらんに學事勉勵勿論の事
- 一、明日の學業は今日爲置くべき事
- 一、小成に安せず古今第一の人物と爲らんことを期すべき事
- 一、良友に親み悪友を避くる事
- 一、禁酒禁色論を俟たざる事
- 一、必要なる滋養物を除くの外美味食慾の念を絶つ可き事
- 一、奢侈に屬することは小人の別なく嚴禁たるべき事
- 一、誠實を以て人に交り毫末だも誦詐欺罔あるべからざる事
- 一、家計學費の餘裕乏しきことを寸時も忘るべからざる事
- 一、人に勝たんと欲せば已れに克たざるべからざる事
- 一、度量寛大喜怒哀常道を守るべき事
- 一、一言を謹しみ行を勵むべき事

一、藥を飲むより毒を禁ずること肝要なる可き事

一、フランクリン氏十二則を毎日三誦し之を躬行すべき事

一、凡る事物に接する時は何故に然ると研究の理想なからざる可らざる事

一、已れを待つ極めて嚴に人を遇する極めて寛ならざるべからざる事

一、豊太閤は尾張の人なり余も亦籍を尾張に屬す太閤も人なり余も亦人なり焉くんぞ同國にして同人たらざるべけんや同人とは何ぞ肉体に非ず其血精其事業を云ふ余第二の太閤と爲り社會の賞讃を得ざるは千慚万愧に堪へざるなり俗歌に曰く尾張名古屋は城で持つと余第二の太閤と爲り城を變し人と歌はしめざるべからず此志望は起臥す時も忘却等閑附にすべからざる事

右の條々は言々何々我親の心頭を病めし結晶なりと敬服し常に其及ばざるを嘆じ此銘の服従の義務を感じて來た物であるかなが、若い時代青年血氣の時代は守り難く服し難く親の教訓に違背する事の尠からざりしを恥しく思ふところ多かりしは遺憾なり實に余をして其重からしめし物は古聖賢人の銘以上直接の感奮を促した家寶不朽の文字なりと信じ今は一幅の掛物に子女の室に之を掲げ以て感謝奮勵の一助となし居るも

のなり只其報恩の未だ及ばざるを嘆じ將來益々努力の要あるを得て居ります

「父母は最も之を敬ひ之が恩に報ひざるべからず抑も吾人は父母に對して最も大に且最も奮き債を負ふものなれば何事を置きても先づ其負債を償還せざるべからざるべからず父母は我を生み我を養育し其厚恩譬へんに物なく故に財産上に於て身体上に於て精神上に於て力の物らん限りを盡して之に報ひざるべからず」と

真に親に對する負債は僅か十五年や二十年の間に償還が出来ない一生を通じて出来ぬに及び更に父は教訓の詩を賦すること三つ之は我が社會に産出されたる際の記念品として前記の家訓と共に一幅の内に納めてあります

乙己八年送兒余赴任京都農林學校
正是西京八月秋 農林學就始官遊
品山評水真餘事 先拜皇陵吉帝州
四液強兵富國秋 林醫奉職帝州遊
育英之業居三樂 此樂當優万户候
當雪多年在洛陽 長晏今日治輕裝
井鞋我恐着鞭後 學海無涯文武揚
實に右の三詩は親父の手に對する餞である且つ未來を囑望せらる、情緒であつた之に

依り林業教育を終へ地位こそ變れ再び林業教育に入り永年の被教育者が教育者の一員となる門口に到着した最初の訓戒であつた予も大に之に依つて力を得た我の人は我天の英才を得て之を教育するの職に在るを満足せられたのであつた更に是れ滿十五年の本年(八月)であつたかと回想すれば當時我が司法の職にありかの長州の古城趾に在りて遙に初任の地に赴くを喜ばれたのである爾後我が奈良時代林業教育界を退いて長野に任官するに當り心竊に喜ばざるの情を漏らされたが再び木曾山林學校に校長格で轉じた時は満足せられて居た事を追想すると予が林業教育界の一道筋に勇進するを期待された物か

抑も我父は三十三星霜の間司法の官職に終身一貫され退職後はピタ一文も他に財物を求むる處なく閑日月を送つて居らる、が之れ只皇恩の至大に感謝して居らる、結果である廉を一天張りの我父にして始めて此事あるが之れにして我が既任の十有五年は父の在職の半にも達しないのである途中林業教育界より官界に轉ずるも、我精神は常に社會的林業教育界の一員たることを自任し又自ら希望して居る次第である假令學校場裡教壇の人たらずとも社會的に力を傾くべき機會は尠くないと信ずるかの俗吏一天張りて通して居ては高潔の氣分を缺く事になり易い又算盤勘定を本務とする林業技術官には算盤以外高尚なる何物かを目的とせ

ばならぬ單に勞働的職務にも精神的職務の伴隨する何物かを求めて居らねばならぬ實ては天下の英才と共に國家樞要の林業的技術に執掌するを快味とする境遇に在りと云ふ
少壯有爲の時代近畿方面に數年間軟弱なる否平凡の山野に接せる我身には爾來信州のアルプス(崇高の意)の氣分に感化を受け更に現在北海の廣潤の原始的の山林に親み得るは我が修養上相對的憾應を覺ゆる次第である蘆花氏の著寄生木に曰く
「人間と云ふものは千難萬辛に處して不屈不撓なのが遂に傑くなるのだ一定不變の確乎不拔の志操が貴いのだ」とか「人間は精神が肝腎精神の腐つたが人間は駄目だ」とか「人間萬事運命の支配を受けねばならぬ」と云警語が聊か吾人を附めて居る
今の青年子女が可成身心を勞せずして可成多の報酬に有付かんと希望する傾向がある殊に専門的實業教育を受けた者迄が大に其傾向あるを慨嘆せざるを得ない施業案調査などの犠牲的に身心を勞する激務は可成さけ安逸的林業事務に走らんとするのが往々施業案調査員の實情であると聞いては誠に残念千萬である却て地方の農林學校出身とか學校出身者ならざる技術者は甘んじて調査の勞苦を嘗め得る資格者だと云ふ嗚呼今や學界青年の軟骨なる氣風も我専門學校以上の林業教育界に漲り來りたるかくれにしても某農林學校に於ける生徒の林業

實習過多を忌避しストライキの原因を生ぜりなど、云ふに至つては沙汰の限りである林業の實社會の活動方面に至つては夏休みも無く冬休みも無く八時間労働の八益敷い時代に出は在つては半日の勞務を要する事も多い學生時代の演習林生活とか實習生活とを實社會の事業に比すれば大差があるまいとて承知せねばならぬ勿論予も學生時代に實社會と同一にせよと主張する者ではないが學窓を出て實社會に入りたる後克く其責務に對して堪へ得るだけ否打勝ち得るだけの心身の修養鍛鍊が出来て居らねば駄目である

孔子曰く

「難きを先にし獲るを後にす」と今人多くは獲るを先にし難きを後にするのは思想に富みはしないか予は經濟界順潮の際官界を去り民業に走りし所謂賢明なる仕方少壯者迄が一時順應した様に思ふが財界不況否戦後經濟界整理の時代が來て少壯者仲間の思潮が一變し行くを満足に思ふ

我が十有五年前を回想すると當時は官吏萬能で學校卒業後の前途は位官等を誇つた時代で學校教員の志望者などは全く尠かつた又實業界に進んで入り得る志望者もなかつた勿論今日程林業界も振つて居なかつたから需要の尠かつた結果でもあらう然し官界も一本筋で通つて行けば相當に立身出世も出来るものだ殊に十年一日の如くに居居つて居る者は一層信用がある

「勝利は能く忍ぶ者に歸す」とはナポレオンの至言なるが社會の現象皆然りである然して林業教育に従事するものか學校を出てから直ぐに學校生活のみに暮らすより一度實社會が官界を履み世の波風に相當實戰の後再び林業教育界に従事する方教育を受け子弟の爲めに幸福に感ずる様思ふ殊に校長と云ふ様な主腦者の立場になるには一層其必要を感ずる余も亦一年有餘の官界生活より木曾校に轉じた時代は前任地京都や奈良時代よりも氣分が變つて居た此點に於て官界多年の苦勞を履み更に育英の途に老年否晩年を送るは最も快心の事かと思ふかの一生涯を通じて單に學校の先生様だけで終るは果して國家の爲め益する所如何なるかと疑ふのである尤も最高學府の教授連中は特別の事はありとするも地方の農林學校に於ては大に此種異動轉換を要するかと思ふかの學校教員を官界に取るを拒絶したり又官界より學校に奉職するを拒絶したりするは邦家人材の登用上面白くない之には勿論適不適あり人物をそれ自身に依り決定すべきであるが今の官制では官吏と實業學校教員との聯環が缺けて居る故人才登用上互に融通がつかなくかの恩給受領者が單に教育界に就職する様になる學校教員運が容易に官界に入り兼ねる現在の實情を慨嘆して止まない是れ所謂系統違の罪か敢て文部内務農商務三省の反省を要しはしないか是れ地方林業教育界の振興を切望する異見に外なら

又自己の十有五年間兩者を跨りかけ鞍替した經驗からの私見である現在忠實勤務に従事せられ林業界の育英事業の衝に當らる、各位の御努力を感謝すると同時に大に同情を寄せたき本員であるかの地方農林學校長會議なども殆んど農學士のみで校長會議にて林業教育振興問題の如き何等眼中なき輩多し我邦家の農林業併行を要するの際林業教育者の不振を嘆ず何んとなれば往つて有爲の輩自ら進みて地方農林に留まるを欲せず欲するものは他に容れられざる輩なりと云ふ様な一般風評あるに至つては不振も亦無理ならざるか余は林業教育の爲めに天職を以て任じたる者又今後と雖も任ぜんとするものである是れ現在の地方に於ける林業の被教育者即ち若き林友(自分も未だ若い)の身上に付向上を希望するの情切なるが爲めである林友より健在なれ殊に學窓に在る林友の前途を懐ふが爲めに予の拙なる回想録を物語れり妄言多罪

箱根みやげ

今野啓藏

一体僕なんか、文章を書くやうな柄でない、然し自分は殆ど完全に近い五日間の理想生活修養主催箱根芦ノ湖畔天幕講習會によつて、稍もすると常に批評的になる自分のすべてが、純な神の如き感謝生活を以つて、終つてきたといふ事と、修養團なのに對してすべての疑惑が晴れた事、終に諸君自分の爲め、將又校風政

延びては我が帝國の爲め、世界の爲め相共に提携せられん事を申上げたい

自分は八月十四日迄東京で英語の夏季講習を受けて居つた、自己の將來の希望から云つても、經濟上からいつても自分は在京して居つた方が徳なのだ、而も授業券の價値を半値してまでも何故箱根へ行つたのか？

乞ふ我をして無遠慮に語らしめよ
自分は幸福だつた。今年の一月三日から病床に臥して三月の末迄恐ろしい恐ろしい病魔に襲はれた。簡單に申すと死すべき自分が又生れかへつてきたのだ。生れかへつてきても亦必ず死ぬ。どうせ死ぬ筈の自分だつたのだもの今度死ぬ迄は猛虎の如く奮闘して有意義に、此の一生を終りたいと誓つたのは三月三十一日人力車上親しい家族の人と再び別れを告げる時だつた、こんな事をいふと修養團なるものが何だか宗教臭いが、(或は宗教かも知れぬが)所謂宗教ではないが修養の極致は何如にして此の生命を何處へ捧ぐるか、といふ問題を明晰に直ちに答へ得るものでなければならぬと思ふ。自分は只病氣をしただけで、その後の生命を如何にすべきかを、十分に解決し得なかつた、然し夜明け近くの東の空のやうにぼんやりとした或光明に接するを得た
四月二十四日觀櫻會兼マラソンを了へてから、次の日の日曜日と一日半、我等が尊い汗を埴ぬつくる檜や松にこそぎ生(得た)金

で、同志の友七七八人が一時に入團してくれた時は實に嬉しかつた、それは丁度異郷で同郷の友と相合ふた時のやうな喜だつた六月十二日午後の辯論會に長谷川君が雄々しくも壇上に立つて、孤軍奮闘の状態で修養團の二大主張を宣傳した、四方より發せられる野次は僕のハートに釘うたるやうな氣がした「お、怒る事を止めよ、怒は心に餘裕ある人の發すべき言ではない、餘裕のない人は進化しない人なのだ」と僕の耳に囁くものがあつた、僕はその後考へた、つまり自分自身が充實して居らぬ爲め、徹底して居らぬ爲めである事を悟つたのであるそこで自己を先づ充實せしむる爲め、徹底せしめる爲め、箱根行を出願した
自分はあの時長谷川君を野次つてくれた人に對して感謝せねばならぬ
八月十五日朝六時萬世橋發御殿場に向ふ。國府津近くになつた時雨漸く晴れて南窓近くに太平洋の洪濤を眺め得る。その時彼は維新の偉人に接し得たやうな氣がした
午前十時半御殿場驛下車、同志數人後顧して富岳の雄大な姿を讚美し乍ら、思ふ存分山の涼風に袂を拂せ乍ら、坂路を急ぐ海か雲かと疑はれる程淡く伊豆の海が見える
箱根路をわかこえくれば伊豆の海やおきのふしまに浪のよる見ゆ
源實朝の歌が思ひ出された、同時に晝尙暗しと云ふ、舊箱根街道と、金の悲鳴の響

音がら谷に響くやうになつた、今の時は餘り懸隔がありすぎるやうに思はれ、何といつても富士の姿に變はない、長尾峠前の第二休憩所の茶屋に着いた時は、殊によく晴れて、對座して話の出来る程だつた
「ルーマニヤとかの皇太子様が、へ御座られるといふ役場から御布令があつたので奇麗に掃除したり旗で飾つたりして、待つて居りましたが、その丁度お天気が悪くつていらつしやうなかつたです」とお茶を運びながら語られる
ビジャと雨のやうに水の湧き出て居る長尾トンネルを黙つて通り抜けた
あ、何たる廣い高原
昔の湖は右手の方に牛の寝て居るやうに前回には箱根山が今尙煙を吐いて居る高い廣い草原の——見よその眼下に彼が新に此の世に生れ變るべき理想郷のある事を、白い天幕が點々と無難作に作り並べられて其の其の物がもはや俗地俗物ではない
彼は飛んでゆくやうに一直線に下りて行つた。會場に着いてからすべの手績を了やして彼は八號家の人となる、午後正二時嚴肅な開會式は講堂に開かれた。後藤幹事長は火の出る如き熱辨で
「此の五日間は最高限度の元氣と緊張と機敏に満てる生活をなして、自己を試して見よ」と叫ばれる
田尻子爵(團長) 神奈川縣事務課長、田澤内

務書記官も列席された(つづく)



永劫の雪 島の里人

トタン屋根、病院の卓子に向つて僕は涼しげな、アルプスの頂の翠眺め入る。
所々に雪を宿して太陽に光るを、羨しく。
手を伸した……。
忽ち私は忌々しい藥の臭曇り汚れて燻く様な炎熱を離れる事が出来た
遠く遠く……。
永劫の雪。
大雪溪

其上を秋津も飛び交うて居る元氣のよい若者はせつせと登つて行く傍には、時得に咲くお花畑の草々車百合、黒百合、白山いちげ、二輪草さては一輪草もある
駒草、虫取草もちらちらする岩雲雀は細い聲で囀る
這松の續いた谷も眼下に開けた涼しい涼しい肌を刺す様な風今し谷の方から上つて来る
こぼし徜徉ふ
碧瑠璃の空
靜な冷い
紅玉の載を示す

不思議な、臚の光に昏み、やがて弦月を見

た。
膜々と寄せて来る雲
立山、鎗、乗鞍など島のやうに見するきり我が立てる峯も洗ひ去らん勢
彼方岩角に小さくふくだんだ物があるそれがホーホーと寂しいメロディを告げる
あ、これが雷鳥であるなど眺めて居るうちいつか私も其のうちに入り親しく遊ぶ
若い壯んな男が
出て来た
石礫を投げる
逃げんと尻尾で千鳥草を撃ち身を振り
ひねり
または俄に躍り立つて
轉々と飛び交はす
やがて其男の大きな聲
あつた
我が身に
わたしは驚いて卓子をささへた
覺むれば汗にひたるうすもの
相も變らぬ
暑さ
暑さ
深ふ藥の臭に喘ぎ喃ぎするのだ



滿州便りの一節

在長春前校長七宮先生より本校職員

某氏へ宛てたる書信の一節を掲ぐ

(前略)當地は先月まで早天打續き黃塵濛々炎熱燒くが如き有様にて聊か閉口致し候滿洲は一般に嚴寒の滿洲としては知られ候へ共炎熱の滿洲は余り知られぬ様被存候嚴寒は勿論嚴寒には候へ共それ相當の設備有之候間却つて内地の設備なき様に戸障子の隙間より遠慮會釋もなく寒風に襲はる、に比しては至極凌ぎよく御座候併し炎熱黃塵蒼蠅等に至りては如何共致し難く殊に空氣乾燥樹木少なく不快にて御座候昨年は可なり虎疫流行致候へ共本年は非常に警戒候爲めか殆んど皆無にて有之候(中略)
當地も仲々物騒に御座候時々町端れでは○賊が出没し時々町中にも入り込み夜間銃聲を耳にすること往々有之候當支那助では殆んど拾間置き位に武○したる巡查や兵士が立つて如何にも物々しき警戒振りには候へ共殆んど○
○同様に御座候當町には日本人を始め支那人朝鮮人露西亞人など居り仲々に面白し事も有之候支那兵の○には全く驚くの外無之候此間長春より例の事件で有名なる寛城子に通ずる日本の○用道路有之候長春と寛城子との間人家なきは約七八町に御座候併し立間に三不關と稱して日本でも支那でも露國でも勢力を及ぼさない一小區域有之候立間區域はわけて物騒に御座候免に角北○用道路を支那○校が二十名ばかりの兵と共に馬車にて通り我○哨の爲めに遮ぎられ候に不法にも○力に訴へ無理

にも通らんと致候に二等卒の微々たる○哨には候へ共一人にて最後の決心を示し候に彼等遂に屈し他の道路によりて寛城子に行つたと云ふこと有之候小生は此記事を見て非常に感激致候武勳赫々胸に燦然たる勳章よりも美しい小氣味のよい所が有之候實に斯くして異域にありて國威を辱しめず事に臨んで毅然たる彼を賞せずんば居られ不申候此様といつ何時第二の察城子事件第二の尼港事件が突發するか不可解にて御座候亦日本の勢力もすばらしきものに御座候(中略) (これより面白き節なるも都合により省略)

編輯室より

私は今此の八月號の編輯を終りました。何となし頭が疲れた様な氣がし、惚としてどいともない事を考へて居ります。中でも本校の發展と共に、此の林友もよい評論を得る事を祈らざるを得ないのであります。而此の林友の愛讀者は本校卒業者のみでなく、或る階級を通じて様々の境遇の方が、或は溪川の流に添うて清き音を清まし鳥の聲嵐の音より外に聞えなむ山間仙境にあつてお讀みの方、或は廣鹿萬丈都會熱市の巷にあつて汗を拭ひ拭ひしながらお讀みの方、官廳の片手間、養蠶の休眠に暇得し方などお讀みの事と思ひます。付いては林友に對して、あうもしいごうもどお考の方もさぞ多い事だらう。其様の方は是非御投書を願ひたいものであります。益々發展の芳針を取らざるに客でない考へです。何れの方を問はず必ず一様の敬意を表します。それには本校卒業の方には、まさか紙屑籠に投込む方はないと信じます。是非とも御投稿は勿論の事一通はお目を通されて本校及林友の發展上私等の思ひ至らない處を御深切なる御指導を願ひたいものであります。第十七回卒業の深澤佐愛君には大正八年度一年間を係として心配に與つたが問題の catt も入れる様になりました。其他形式内容に御注文ありまじやう承りたいものです。且林友第一號より本報百三十號に至る經過傾向佳否を系統的に論評するも面白い事ですが、其様のお考の方はないでしやうか

暑中見舞謝禮

本校卒業生並に在學生又は本校關係諸氏に於て暑中見舞狀を寄せられたる各位左の如し並に御厚意を謝すると共に諸氏の御健康を祈る

- 美雄 古畑 今朝 茂
琴義 金井 澄水
關本 末雄 等々力 官吉
山澤 節男 岡庭 泰平
北川 壯三 星 重實
水上 將英 木下 旭
篠原 正義 藤原 幾喜
前田 良惠 有賀 正一
吉田 良惠 有賀 正一

會員異動

- 塚田 繁次郎君 北海道帝林局札幌支局に就任あり
安藤 清吉君 北海道帝林局札幌支局に就任せらる
可兒 敏郎君 北海道帝林局札幌支局に就任せらる
花村 集則君 御嶽村居住せらる
任 せり
米倉 功君 岐阜縣惠那郡帝林局付出張所に就任
所木 會伐君 山梨縣鹽津郡津町居住
深澤 佐愛君 岐阜縣惠那郡津町居住
原 舍次郎君 北嶺道帝林局札幌支局に就任
水野 宏君 福島町居住
桂 小二郎君 静岡縣帝林局濱松出張所に就任
小縣 球次君 鹿兒島縣鹿島郡内山林會事務所就任
古根 是君 鹿兒島縣鹿島郡内山林會事務所に轉任せらる
永井 順君 愛知縣東加茂郡旭村中地製材株式會社に就職
米久保 春雄君 宮崎縣西臼杵郡椎葉村尾崎任友山林出張所に轉任

會員異動

- 近田 久良治 佐藤 誠一
原 川 良材 吉田 正男
八木 克己 唐澤 俊文
長田 正實 東原 正三
宮田 正雄 小崎 次郎
星加 正功 荻原 惠治
古根 是 今井 忠夫
山梨 映二 (在校) 生
小松 雄二 青井 正夫
加藤 浪男 筒井 正夫

正誤

先號會員死亡欄に山本茂君を發表致しました誤に訂正します

長野縣西筑摩郡福島町四〇番地

長野縣松本市小柳町八十五番地